

研究主題 二人称の知により協働生成される ことばと経験世界に関する研究

要約：子どもの言語能力を高めるには、言語活動を通してその子の【自分で使えることば】を生成することが必要である。ことばを生成する運動は“自分－相手”という二人称的関係性のもとに起こる。相手が自らの経験世界へと回帰する志向性を同型的になぞって自分の経験世界に回帰し、そのことばにまつわる【こと】を掬いあげ、ふるまい（＝発話）として相手に示す。「二人称の知」であるこのような“【こと】のやりとり”の繰り返しにより、ことばと経験世界は協働生成されると考えた。その過程をモデル化した“ことばと経験世界の協働生成過程モデル”を適用して学習活動場面を分析した結果、“自分－相手”の二者が、互いの経験世界や掬いあげてきた【こと】を同型化させながら、ことばと経験世界を協働生成していることがわかった。

キーワード：二人称の知，ことばと経験世界の協働生成，志向性，同型化，
デノテーション，コノテーション

I 問題の所在と研究の目的

平成20年3月に告示された『小学校学習指導要領』は「言語活動の充実」への配慮の必要性を強調している。これは、言語活動を充実させ、言語能力を向上させることが、子どもの「思考力、判断力、表現力その他の能力」を育み、コミュニケーションや感性・情緒を高めると考えられているからである。

しかし、その子が【自分で使えることば】をどれだけ豊かに持っているかによって、その言語活動が充実する可能性は大きく左右される。

【自分で使えることば】を生成し使うことで、自らの思考の飛躍や深まりを感じたり、相手とのコミュニケーションの手ごたえを感じたりできる言語活動が、言語能力を高めると考える。

では、実際に【自分で使えることば】を生成するとは、どのような事態なのか。

【自分で使えることば】は、デノテーション

を獲得するだけでは生成されない。コノテーションを付与することにより、そのことばは【自分で使えることば】に生成される¹（図1）。



図1

【自分で使えることば】の生成のために、ことばにコノテーションを付与するには、自らのうちに、いまだことばにならない経験世界の生成にも関わる運動に起こさなければならない。

そこで本研究では、ことばと経験世界がいかにかに協働生成されるかを、学習活動場面を事例として分析し考察する。

II 研究の方法

本研究は、ことばと経験世界がいかにかに協働生

成されるかを明らかにすることを目的とする。

そのためにまず、丸山圭三郎の「人間存在二重分節理論」²やメルロ＝ポンティのことばに関する視点を援用し、ことばの生成についての捉えを明らかにする。そして、その捉えをもとに、浜田寿美男の「三項関係」等も援用し“ことばと経験世界の協働生成過程モデル”（以下“協働生成過程モデル”と記す）を作成する。

そのうえで、ことばと経験世界の協働生成が活発に行われる授業を開発し、実践する。

その授業での学習活動を事例とするために、数名の子どもについて、授業中の様子を周知的・参与的にビデオ記録する。そのビデオ記録から、広沢さん（仮名）と田村さん（仮名）に注目してトランスクリプトを作成し、行為の詳細な記述を行う。その記述から浮かび上がった二人の相互行為について“協働生成過程モデル”を適用し、学習活動場面におけることばと経験世界の協働生成について分析、考察を行う。

III 論文の構成

- 第1章 問題の所在と研究の目的及び方法
- 第2章 ことばと経験世界の協働生成過程
- 第3章 ことばと経験世界の協働生成を支える二人称の知
- 第4章 ことばと経験世界の協働生成の成り立ち
- 第5章 研究のまとめと今後の課題

IV 研究の概要

1 ことばの運動性を捉える

ことばは世界を分節する構造をもつ。だからことばは運動性のものなのだ、というのが丸山圭三郎の主張である。われわれが普段使っていることばは、決められた、硬直した文化としてのラングである。これをノモスと呼ぶ。丸山は、このノモスの下層に「いまだノモスにならざるランゲージュ」を配置し、このノモスと、ノモスならざるランゲージュを、あわせてコスモス

と呼び、われわれ人間が持つシンボル化能力であるとした。また、この意識構造の、より下層には、シンボル化能力が掬いきれなかった生のエネルギー、カオスを配置している。ことばは、ノモスからノモスならざるコスモスへ、あるいはコスモスからカオスへと回帰する円環運動により生成されると、丸山は主張する（図2³）。

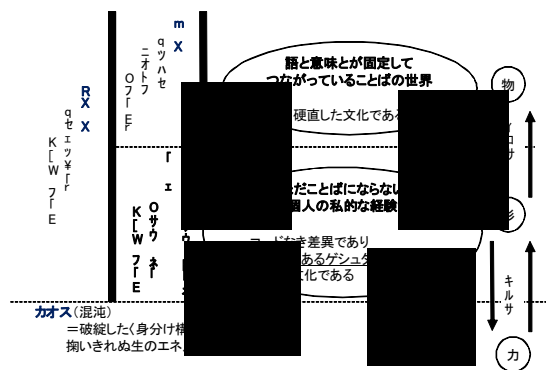


図2

2 思考と表現はパロールのもと共起する

丸山と同様に、ことばを動的に捉えたのが、メルロ＝ポンティである。彼は、「言語の〈生命〉」が変質してことばの意味が凝固してしまうと、人は、思考や語りをしなくなる、したがってことばの〈言語的〉意味は、「私の志向」と「語」をつなぐ所作、ふるまいにおいて作用すると述べている。“ことばの意味”は、パロール（言活動）を通してしか現れえない。この「私の志向」と「語」をつなぐ所作に生まれる【こと】こそが「〈言語的〉意味作用」であり、「言語の〈生命〉」であると主張する⁴（図3）。

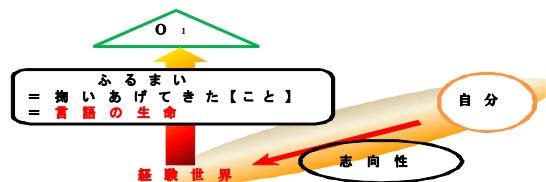


図3

3 ことばは他者との関係のもと獲得される

ことばの“伝達する能力”に特化して考察したのが、浜田寿美男である。浜田は、互いに相

手を能動する〈主体〉であると認めたときにはじめて「一緒に見る」関係が成り立つと述べている。「一緒に見る」関係になってはじめておこる「同型的ななぞりの過程」によって、母親の生きる意味世界は、子によって子ども自身のもとに敷き写されるとし、これを浜田は「三項関係」と名づけている(図4⁵)。

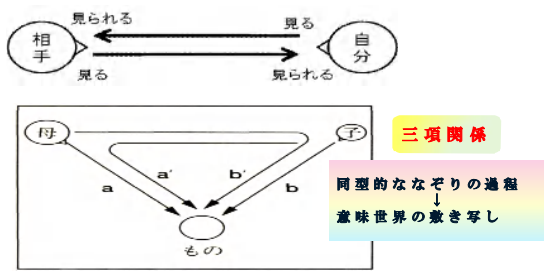


図4

浜田はこの「三項関係」を、ことばの、主にデノテーションの獲得においても適用した。

しかしことばの意味は、デノテーションとコノテーションを含めながら常に変容していく。

このデノテーションとコノテーションの関係は、丸山の主張する〈ノモス化されたコスモス〉と〈ノモス化されないコスモス〉の連関現象に重なる。つまり、ことばのデノテーションをノモスに位置づけると、〈ノモス化されないコスモス〉から〈ノモス化されたコスモス〉へと物象化する動きそのものが、コノテーション(「言語の〈生命〉」であり「新しい意味」)の生成であるとすることができるのである。

4 “ことばと経験世界の協働生成過程モデル”

これらの考えから、以下のようにことばと経験世界の協働生成過程のモデル化を試みた。

まずことば〈01〉は相手にデノテーションとの差異として迫ってくる。この差異化作用が相手を経験世界に志向させる。

自分は相手の志向性を同型的になぞり、〈01〉にまつわる【こと】を掬いあげる。この経験世界から〈01〉へと掬いあげる動きそのものが、

コノテーションであり、「言語の〈生命〉」「新しい意味」の萌芽である。

相手もまた自分のふるまいから自分の志向性をなぞり、〈01〉にまつわる【こと】を再び掬いあげてくる。

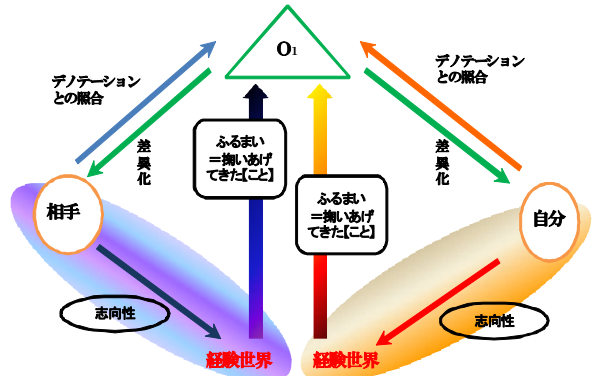


図5

このような“【こと】のやりとり”の繰り返しにより起こる円環運動により、ことばと経験世界は協働生成されると考えた(図5)。

5 協働生成を支える「二人称の知」

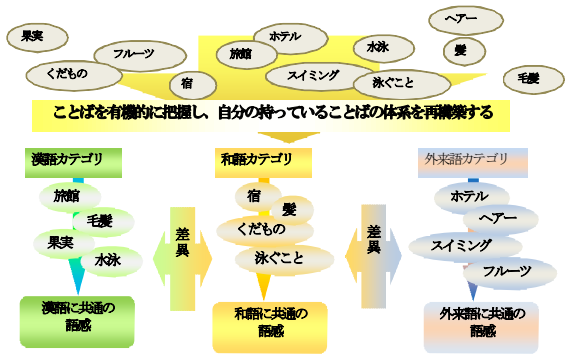
なお、この“協働生成過程モデル”を“自分-相手”という二人称的关系を土台に作成した根拠や、その“自分-相手”が互いの経験世界に向かう志向性を見ることができると設定した根拠、さらに互いが経験世界から掬いあげてきたものを【こと】として示す根拠を「二人称の知」⁶に求めた。木村敏の〈あいだ〉理論⁷と西田幾多郎の「絶対無」の概念⁸を援用し、互いが相手のパロール(言活動)によって脱中心化されることによって起こる“〈あいだ〉における【こと】のやりとり”を「二人称の知」と捉えた。この「二人称の知」により、自分と相手は、互いのふるまいのなかに、経験世界への志向性を見あい、そこから掬いあげた【こと】における同型性を認めあえるのである。

6 「二人称の知」を起こしやすい授業の開発

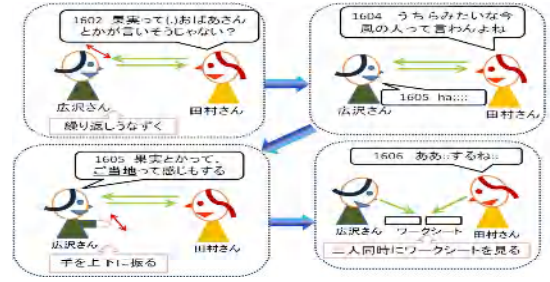
本研究の事例とするために、ペア活動と一斉活動を交互に取り入れた学習形態をもつ単元

「漢語・和語・外来語」（5年国語 光村図書）を開発した（図6）。

- 事例授業能力と内容**
1. **全員で** 課題確認と学習動機を確立する
 2. **ペアで** 前回の語彙がイメージの違いについて話しあ
 3. **全員で** 各ペアの話し合いの内容について話しあ
 4. **ペアで** 3.をもとに理路の語彙がイメージの違いについて話しあ
 5. **全員で** 漢語・和語・外来語の語彙がイメージの違いについて話しあ



7 事例より ↑ 図6
二人は二回目のペア活動で、「果実」についてのコノテーションを出し合う（図7）。



↑ 図7 ↓ 図8

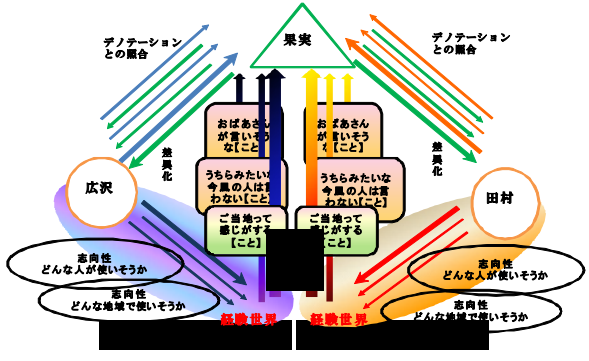


図7の発話をモデル化すると、二人が活発に「ことば」と経験世界の協働生成を行っていることがわかる（図8）。「おばあさんが言いそう」「今風な人は言わない」という【こと】におけ

る志向性や、「ご当地っていう感じがする」【こと】における志向性は、一回目のペア活動では、見られなかった。しかし、次の一斉活動で、他の子たちがよく語った志向性である。二人はその一斉活動で、繰り返される他の友達の発話を同時に聞き、その度に同じ志向性をなぞっての回帰を繰り返していた。そのため、二人は新たな志向性を共につかんでおり、しかも経験世界はゲシュタルトの同型化を起こしている。だからこそ、互いが互いの発話から瞬時に回帰して同型の【こと】を掬いあげてくることができると、活発な話し合いがなされるのである。

また他の事例からは、二人が二人称的関係をうまく立ち上げるまでに様々な試行錯誤を行う様子や、一斉活動の場でも、聞き手となる子どもたち一人一人が、話者との間に二人称的関係を構築していること、ことばとことばの差異をコノテーションとして立ち上げながら、漢語・和語・外来語というカテゴリ間の差異を見出していく過程等を明らかにすることができた。

V 今後の課題

本研究では【自分で使えることば】を生成する事態を明らかにすることができた。そこで、国語科の他の単元においても、ことばを生成する二人称的関係性を立ち上げやすい単元構成を工夫し、実践していくことを今後の課題とする。

注)
 1 丸山圭三郎, 『言葉とは何か』, 筑摩書房, 2008, p.135
 2 丸山圭三郎, 『言葉と無意識』, 講談社, 1987, p.185
 3 丸山圭三郎, 『言葉と無意識』, 講談社, 1987, p.180
 図3・p.186 図4をもとに筆者が作成
 4 M. メルロ＝ポンティ, 『知覚の現象学 I』, 竹内芳郎・小木貞孝訳, みすず書房, 1967, p.320 他
 5 浜田寿美男, 『私』とは何か』, 講談社, 1999, p.152
 図4-4, p.153 図4-5のEをもとに筆者が作成
 6 木村敏・檜垣立哉, 『生命と現実 木村敏との対話』, 新曜社, 2006, p.8
 7 木村敏, 『あいた』, 筑摩書房, 2005 他
 8 永井均, 『西田幾多郎〈絶対無〉とはなにか』, NHK出版, 2006 他